

「東大を出てなぜ看護師に」 少数派の男性は看護協会トップになった

2026 年 3 月 13 日 6 時 00 分

聞き手・山下裕志

1995 年の朝日新聞家庭面に「少数派の男性たち」と題して、大学病院で働く男性看護師が取り上げられました。それから 30 年。記事の看護師、秋山智弥さん(57)は男性として初めて看護協会のトップに就きました。「男性初」から見えた世界とは。



——昨年 6 月、看護師や保健師ら 73 万人を会員に持つ[日本看護協会](#)の 15 代目会長に選ばれました。80 年の歴史の中で男性が会長になるのは初めてです。

「看護師の 9 割以上が女性で、最初に勤務した[東大病院](#)の[整形外科](#)では初めての男性看護師でした。それから『男性初』の経験が多く、『初』に慣れてはいます。自分の中では、男性だからといって大きな違いがあるわけではありません。むしろ、会長の責任の重さの実感と、今までの経験を生かしてできることが増えたワクワク感があります」

「ただ、会長就任前の 2017 年に副会長になるとときには、看護職の重要な役職が女性でなく男性になることに反発があるのではないかと気がかりな面もありました」

「実際、副会長選挙のとき、投票で信任されるか最後まで心配でした。結果をみると信任されてはいましたが、他の女性役員に比べて、得票数は若干ですが少なかった。男性だから票を入れないという人もいたのだろうと感じました。ですが、そこから副会長として 2 期目、3 期目の選挙に臨み、3 期目になると、他の女性役員との票差はなくなりました。実績を見てもらえば変わることも実感しました」

——「男性初」だから失敗できない、というプレッシャーはありませんか？「女性初」の経験者は、失敗した時に「女性だから」とレッテルを貼られることを心配しています。

「実績を出すことに男女は関係ないので、選任されてしまえば不安はなくなりました。私が会長に就いたことで、マイノリティー（少数派）の男性看護師たちが勇気づけられたという声を聞きます。ロールモデルができたと思ってもらえてありがたいです」

「もし『女性初』でうまくいかなかったとしたら、それは成功させられなかった周りの失敗だと思います。『女性初』にあわせた環境を整えきれなかった。反省すべきは社会の側で、女性の側ではありません」

[東京大医学部付属病院時代に、患者の包帯交換をする秋山智弥さん。整形外科病棟で男性初の看護スタッフだった=1995 年、東京都文京区](#)

